

氏名(国籍)	安 <sup>あん</sup> 平 <sup>びよん</sup> 鎬 <sup>ほ</sup> (韓国)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博乙第1777号
学位授与年月日	平成13年11月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日韓両言語のアスペクトに関する対照研究 —アスペクト形式の文法化を中心に—
主査	筑波大学教授 林 史 典
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 坪 井 美 樹
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 鷲 尾 龍 一
副査	筑波大学助教授 矢 澤 真 人
副査	筑波大学助教授 大 倉 浩

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

日本語と朝鮮語との関係については夙に広く注目されており、日韓両言語の文法的類似性に関しても既に多くの論考が公表されているが、本論文は、それらが看過してきた両言語におけるアスペクト形式の用法的差異に着目して、これを存在動詞における文法化(grammaticalization)の度合いの違いという観点から解明したもので、次のような構成をとっている。

### 序 論

第一章 テンス・アスペクトに関する一般的論議

第二章 「ある／いる」と「iss-ta (있다)」

第三章 「シテイル」と「hako iss-ta (하고 있다)」 「hay iss-ta (해 있다)」

第四章 「シタ」と「hayss-ta (했다)」

第五章 「スル」と「han-ta (한다)」

第六章 中世末期日本語と現代韓国語のアスペクト体系

—アスペクト形式の分布の偏りについて—

### 結 章

まず、「序章」はこの研究の目的と方法に関する総論で、研究対象とする現象を提示して問題を提起し、考察の方法、予想される帰結について概説している。

第一章では、「テンス」「アスペクト」「パーフェクト」「文法化」などといった基本概念が解説され、以下の章で用いる術後が定義されている。

第二章は、現代日本語の存在動詞「ある」「いる」と、現代韓国語の存在動詞「iss-ta」についての考察である。主文の述語として用いられる場合と、補助動詞としてアスペクトを表す形式に用いられる場合に分けて、両言語の共通点と相違点を明らかにしている。

第三章では、現代日本語と現代韓国語のアスペクトについて、「存在動詞の文法化」という視点から対照的考察

が行われている。すなわち、現代日本語の「シテイル」構文と現代韓国語の「hako iss-ta」「hay iss-ta」構文を、

①動詞の項構造 (argument structure) に存在場所を表す項 (「ニ格」「ey (에) 格」) が含まれるか否か、

②結果状態を表す表現と存在場所を表す項が共起可能か否か、

という二つの基本から三つのタイプに分けて検討し、その結果に基づいて、現代韓国語は現代日本語に比べて相対的に「(アスペクト形式を構成する) 存在動詞の文法化の度合い」が低いことを指摘している。また、韓国語では動作継続を表す「hako iss-ta」「hay iss-ta」構文が存在場所を表す「ey (에) 格」名詞句と共起可能である点についても、韓国語のアスペクト形式を構成する存在動詞「iss-ta」の文法化が日本語に比べて相対的に進んでいないことを示す証拠であると主張している。

第四章は、現代日本語の「シタ」とそれに相当する現代韓国語「hayss-ta」についての考察である。すなわち、現代日本語では単純状態を表すのに「シテイル」、パーフェクト現在を表すのには「シテイル」のほか「シタ」を用いるのに対して、現代韓国語では単純状態・パーフェクト現在ともに「hayss-ta」を用いることを指摘し、その理由を、「hako iss-ta」「hay iss-ta」を構成する「iss-ta」には固有の語彙的意味・機能が残っている点に求めている。その上で、パーフェクト現在を「hayss-ta」で表現できるようになったのは、「-e is- (어 있) -」>「-eys (엿) -」>「-es (엿) -」>「-ess (엿) -」という文法化過程において、二重母音が短母音化することによって存在動詞が認識されなくなったためであると主張している。

第五章では、現代日本語の「スル」と現代韓国語の「han-ta」が対照され、それをもとに日本語「スル」に相当する「han-ta」と日本語「シテイル」に相当する「hako iss-ta」の差異が考察されている。「han-ta」と「hako iss-ta」は、ともに動作継続を表すことができるが、「han-ta」と異なって「hako iss-ta」が存在場所を表す「ey 格」と共起できるのは、「iss-ta」に語彙的意味・機能が残存しているからであり、「hako iss-ta」がさらに「hako iss-nun-ta (하고 있느냐)」になるのも同じ理由によるものであることを明らかにしている。

第六章は、中世末期日本語のアスペクトと現代韓国語のアスペクトとの比較研究で、次のような諸点を解明している。

①主節末で「シタ」と「hayss-ta」は単純状態、動作パーフェクトを表し、「スル」と「han-ta」は動作継続を表す。

②両言語の存在型アスペクト形式 (「シテイル」「シテアル」／「hako iss-ta」「hay iss-ta」) を構成する存在動詞 (「イル」「アル」／「iss-ta」) は、内容語から機能語への文法化が、現代日本語に比べて進んでおらず、全体的な傾向として存在文的な特徴を示す。

③両言語の存在型アスペクト形式は存在分的な性質を持っているため、単純状態や動作パーフェクトのような非存在文的な表現は存在型アスペクト形式では表すことができず、「シタ」形と「hayss-ta」形で表される。

結章では、本研究によって明らかになった点を総括するとともに、アスペクトに関する日韓両言語の対照研究のあり方に論及し、最後に将来の課題を明記している。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

文法構造の酷似した日韓両言語間には、固有の且つ興味深い問題が多く、対照的研究にも大きな進展が認められるが、従来の研究が見逃してきた両言語間の重要な差異の一つを詳細に考察し、歴史的視点を含んだ広い角度からこれを解釈することに成功したところに本論文の価値が認められる。特記すべき成果は、次の5点に要約できる。

①日韓両言語のアスペクト研究では、ともに補助動詞として存在動詞を用いる点、アスペクト形式の表す意味が両言語で類似している点、ともにアスペクト形式を構成する存在動詞が文法化することによってテンス形式 (「タ」と「-ess」) が成立している点など、専らその類似性に関心が払われてきたのに対して、

(1) 세미는 할머니를 닮았다. (\*닮고 있다/\*닮아 있다)

seymi-nun halmeni-lul talm-ass-ta (\* talm-ko iss-ta / \* talm-a iss-ta)

セミ (人名) は 祖母を 似る タ (\*似る テイル/\*似る テイル)

セミ (人名) は祖母に似ている。

(2) 다로는 30살 때 결혼했다. (\*결혼하고 있다/\*결혼해 있다)

talo-nun 30-sal ttay kyelhonhayss-ta (\* kyelhonha-ko iss-ta / \* kyelhonhay iss-ta)

太郎は30歳 時 結婚する タ (\*結婚する テイル/\*結婚する テイル)

太郎は三十歳の時結婚している。

のように、現代韓国語では単純状態・動作パーフェクトを表す文に過去を表す「hayss-ta」が用いられることに着目し、その理由を明らかにすることによって両言語のアスペクトに関する大きな問題の一つを解決したこと。

②その過程で、存在動詞に関する語彙的意味の希薄化と文法的意味の発達を「文法化」と規定し、その度合いの違いを説明原理として導入することに成功していること。

③日韓両言語のアスペクトに通時的考察を加え、中世には日本語においても未だ存在動詞の文法化が不完全であった点を指摘したこと。

④現代韓国語における「han-ta」と「hako iss-ta」の用法的差異などのように、先行研究では説明できなかった事実について説得力ある解釈を提示できたこと。

⑤以上を通して、日韓両言語の対照的研究に新たな視点と可能性を提示できたこと。

本論文が高い達成度を有していることは、既発表論文に対する学界の評価からもあきらかであるが、将来への課題もまた無しとしない。例えば、文法化という概念には、意味論的・文法論的に深化させるべき余地が残されている。文法化と形態変化との関係についても、関連する諸事実を広く視野に入れた考究が必要であろう。このような課題を解決することによって、本研究の視点と方法はいっそうその可能性が広がるものと確信される。考察の対象となった日韓両言語の用例については、詳密で慎重な検討がほどこされているが、本論文とは異なる角度からの吟味を要する場合は皆無ではない、本研究の精度を高めるためには、このような点も無視できない。通時的考察については、日韓両言語にわたって歴史的視野を広げることにより、いっそう射程圏の大きな論に発展することが期待される。

よって、著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。